

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 27 日現在

機関番号：34523

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2013～2014

課題番号：25560016

研究課題名(和文) アジア諸国の山車の比較研究を通じてアジアデザイン語法の基盤をつくる試み

研究課題名(英文) An Attempt to Construct the Foundation of an Asian Design "Grammar" through a Comparative Study of Asian Floats

研究代表者

杉浦 康平 (SUGIURA, Kohei)

神戸芸術工科大学・アジアデザイン研究所・名誉教授

研究者番号：00226432

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,800,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、アジアデザイン語法の観点から、アジア各地に伝えられたさまざまな舟山車の形態・構造・象徴性と祭礼における役割について明らかにした。具体的には、国際シンポジウムを行い、国内外の研究者らと連携しながら、(1) 黄金の霊鳥「キャラウェイ」を飾るミャンマーの仏像巡行船、(2) タイのチャクブラ(仏像巡行祭)における龍船パレード、(3) タイの伝統文化にみる「鳥」と「蛇」のシンボリズム、(4) バリ島の王家の葬儀に曳きだされる山車、(5) 日本における舟山車・長野の「オフネ」、(6) 龍の船・鳥の船 中国・日本の舟山車、これら6項目についての報告書を取りまとめ、舟山車のデザイン構成原理を明らかにした。

研究成果の概要(英文)：With the particular emphasis on the foundation of an Asian Design 'Grammar', this study clarifies the forms, structures, symbolism, and ritualistic roles of various traditional boat-shaped floats that have been preserved up to the present in various Asian locales. Specifically, the following six items have been studied through the international symposium and the creation of its report in collaboration with researchers in and outside Japan to elucidate the principles of the design composition of boat-shaped floats: (1) the Karaweik, a Buddhist barge in the shape of a golden bird, in Myanmar; (2) the Dragon Boat Parade of the Chak Phra Festival (floating Buddhist procession) in Thailand; (3) the representation of birds and snakes in Thai art and culture; (4) royal cremation in Bali (Indonesia); (5) the Ofune of Nagano and other Japanese boat floats; and (6) dragon- and bird-shaped boats in China and other boat-shaped floats in Japan.

研究分野：民俗学/デザイン学

キーワード：アジアの図像 アジアの山車 アジアンデザイン 舟形山車 デザイン語法

1. 研究開始当初の背景

(1) 学術的背景

日本のデザイン教育において、アジア諸国の伝統文化にみられる図像や造形に着目したデザイン教育は未だ体系化して行われていない。従ってこうした研究の発表の場や人材ネットワークの構築に関しては未だ課題が多い。研究者代表の杉浦は、グラフィックデザイナー・アジアの図像学研究者として、30年以上に渡ってアジアの造形文化に関するアジアデザインを主軸としたデザイン教育、出版物や展覧会企画などに携わってきた。また、5人の分担者に関するそれぞれ日本、中国、台湾、インド、インドネシアなどの祭礼・図像・生活空間・集落・染織に関する研究を継続的に行っている。

「アジア諸国の山車」についての研究としては、これまで研究メンバーらが所属する神戸芸術工科大学アジアデザイン研究所を拠点に、国際シンポジウム「動く山—この世とあの世を結ぶもの」(2010年6月 吉武記念ホール/図1~5)ならびに本シンポジウムをまとめた書籍の出版(左右社 2012年12月)を行うなど、国内外の研究者らと連携し日本、中国、インド、インドネシア、タイの山車についての研究を進めてきた。

(2) 研究対象の選定について

今日のデザイン教育において実践的なアジアデザイン語法の基礎を築くには、「アジアのカタチの源流」の再認識と有効活用が必要不可欠である。「アジアのカタチ」を紐解くにはアジア諸国の多様な伝統的造形文化を注視する必要があるが、本研究では祭礼空間において最も象徴性・装飾性の高い山車や神輿を対象を絞り、中でも、今までアジアデザイン領域で殆ど紹介されることのないアジア各地の舟形の山車に着目し、「水に浮遊する山車」のデザイン構成原理を探ることとした。

2. 研究の目的

本研究は、ミャンマー、タイ、インドネシア、日本に伝えられたさまざまな山車、とりわけ、舟山車の形態・構造・象徴性と祭礼における役割について明らかにし、それぞれが示す造形的・神話学的・仏教宇宙的な成果をアジアデザイン領域に還元することを目的とする。

3. 研究の方法

本研究では、アジアの舟形の山車をテーマにした国際シンポジウム「送る舟・飾る船 鳥と龍が支えるアジアの舟山車」を2013年5月25日に本研究メンバーの所属する神戸芸術工科大学にて開催し、

- ①—ミャンマーの「カラウエー船」
- ②—タイのチャクプラ祭「ルア・プラ・ナン」



図 1



図 2



図 3



図 4



図 5



図 6

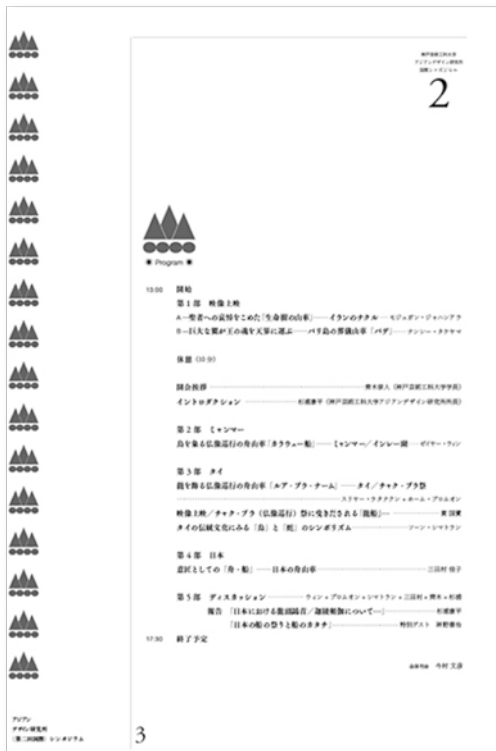


図 7



図 8



図 9



図 10



図 11



図 12



図 13

- ③—タイの伝統文化にみる「鳥」と「蛇」のシンボリズム、
 - ④—巨大な翼が王の魂を天界に運ぶ「バデ」と呼ばれるバリ島の葬儀塔
 - ⑤—日本（信濃）のオフネ（舟山車）
 - ⑥—中国・日本の「龍」と「鳥」を装飾した舟山車の事例を口頭発表の形式で発表。
- その後、これらの発表を行った国内外の研究者と継続的に連携をとりながら、発表原稿を取りまとめ、神話や文化を背景にして、造形の意味を読み取る考察を加えた構造原理を報告書にまとめ、教育テキストを作成した。

4. 研究成果

本研究における主な成果としては、上記の国際シンポジウム（図 1～12）、および、報告書（図 14～17）の 2 点が挙げられる。まず、国際シンポジウムの概略は以下の通りである。

(1) プログラムについて

プログラムの内容を以下に示す（図 6～7）。

第 1 部 映像上映

A—『バリ島「王家の葬儀に曳きだされる山車』、ナンシー・タケヤマ

B—『イラン「アシュラ祭の生命樹の山車』、モジュガン・ジャハンアラ（イラン）

イントロダクション……杉浦康平

第 2 部 [ミャンマー]

『黄金の霊鳥「キャラウェイ」を飾る仏像巡行船のデザインと象徴性』、ゼイヤー・ウィン

第 3 部 [タイ]

『チャクプラ（仏像巡行祭）に曳きだれる、龍船パレードのデザインと象徴性』、ホーム・プロムオン

映像上映『スラタニのチャクプラ祭』、黄 國賓

『タイの伝統文化にみる「鳥」と「蛇」のシンボリズム』、ソーン・シマトラン

第 4 部 [日本]

『舟山車さまざま + 長野の「オフネ」のデザインと象徴性』、三田村 佳子

第 5 部 [ディスカッション]

ゼイヤー・ウィン + ホーム・プロムオン + ソーン・シマトラン + 三田村 佳子 + 齊木 崇人 + 杉浦康平 今村文彦（司会）

(2) 報告書について

報告書は、174 頁（表紙カラー、本文単色）とし、(1) (2) に示した本シンポジウムプログラムをまとめ、原稿および発表で使用した舟山車の画像を中心に構成した。

以下がその概要である。

①—はじめに/杉浦康平

②—ゼイヤー・ウィンによる『黄金の鳥を象るミャンマーの「カラウェー船」—仏像を戴き湖上を巡る』

インレー湖（ミャンマー中東部、シャン州）で雨季あけ（ミャンマー暦では 7 月、太陽暦の 10 月）に行われるパウンドーウー祭では、黄金の仏像を乗せた舟山車が曳航される。上座部仏教を信仰するミャンマーのこの祭りでは、湖の中央部にあるパウンドーウー・パゴダ寺院に祀られた五体の仏像を、巨大な鳥の装飾を施したカラウェー船上に移し、インレー湖や周辺の村々へと巡行する。本発表は、この祭りの仏像巡行の主役となるカラウェー船、とりわけ、黄金の霊鳥を象る舟山車の造形的な特質について具体的に考察した。

③—スリヤー・ラタナクン+ホーム・プロムオンによる『慈雨を招く龍の舟山車「ルア・プラ・ナーン」—タイのチャクプラ祭』

タイ南部では、雨季の黙想期間に陽気である有名なチャクプラ祭が行われる。そこでは、ルア・プラ〔僧侶の舟〕と呼ばれる舟山車の行列がみられる。ルア・プラの中心部には、王宮を象徴するブサボクが据えられ、仏像が安置されている。船首には壮麗なナーガ（龍）、船腹には花や緑の葉、金箔や銀箔、ナーガの模様などが美しく飾り付けられることが多く、互いにその意匠を競い合う。このように特別に装飾されたルア・プラのことをルア・プラ・ナム（ナムは「水」を意味する）と呼ぶ。本発表では、ナーガを飾るルア・プラ・ナムの造形的な象徴について考察を述べた。

④—黄国賓による『多頭の龍が乱舞する—スラタニのチャクプラ祭』

タイ、スラタニで行われる雨期明けを祝うチャクプラ祭りはシュリー・ヴィジャヤ王朝時代に始まったといわれる。船形の山車は、路上で曳行される「ノム・ブラ」、水の上を巡業する「ルア・プア」がある。ノム・ブラ

は木材で作られることが多く、先端部分に龍（Naga）の装飾が施される。路上を巡業するノム・プラの場合、その構造体の中心部分に須弥山（宇宙山）を象徴する建物（ブサボック）が建てられ、仏像がその中に安置される。この発表では、チャクプラ祭りのパレード様子を収めた映像を用いて、チャクプラ祭における舟型山車の構成原理について考察した。

⑤-ゾーン・シマトラン『タイの伝統文化にみる「鳥」と「蛇」のシンボリズム』

仏教、ヒンドゥー教、二つの宗教が調和し、共存するタイ文化において「鳥」と「蛇」はヒンドゥー教と仏教の深い結びつきを示すもので、サンスクリット語で蛇を意味するナーガは水（陰）を表わし、火（陽）を表わすガルダとともにタイではよく用いられるモチーフである。ナーガのモチーフや造形は、国王が水上運行パレードに用いる平船や御大葬の葬儀車、また、チャクプラの船の装飾に数多くみられる。鳥については、ヒンドゥー教起源で、ブラフマの乗り物とされる「ハンサ（白鳥）」は、純潔、創造、叡智の象徴でラーマ1世は、水上運行パレードの平船の船首にハンサを飾った。また、モン族の仏教寺院にはハンサの装飾を施した柱が必ず立てられている。本発表では、タイの社会・文化的背景をふまえながら、タイ生活様式の中で生まれた「鳥」と「蛇」の宗教的造形についての考察した。

⑥-ナンシー・タケヤマによる『巨大な翼が王の魂を天界に運ぶ「バデ」ーバリ島の葬儀塔』

バリでは、火葬儀礼を天界への入り口ととらえ、人生における最大の行事として、大規模な葬列が行われる。2010年11月に行われたウブドのプリアタン王家の第9代の王、故イダ・デワ・アグン・プリアタンの葬列は、プリアタン王家の方々、外国の要人、何千人もの村人たちが参列するなど、この20年間にバリで行われた火葬儀礼の中では最大の規模であった。葬列の中心となるバデと呼ばれる葬儀塔は、バリの世界観を具現化したもので、ブダワン・ナラという巨大な亀と、バスキとアナタボガという2匹の神秘的な龍とで地下世界、その上に人間が住む地上界と、インド神話の乳海攪拌で表現される天界が聳え立つという3重構造になっている。本発表では、この火葬儀礼の映像を用いながら、バデの構成原理についての考察した。



図 14

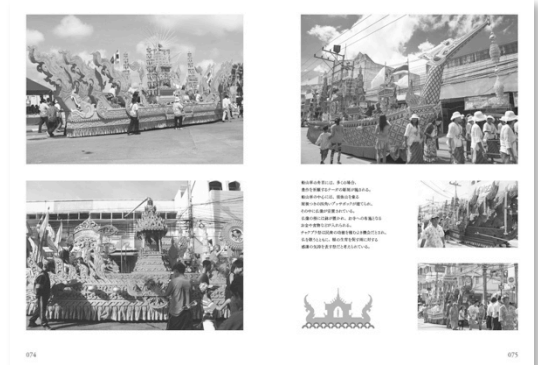


図 15



図 16



図 17

⑦-三田村佳子による『意匠としての舟・船—日本(信濃)のオフネ(舟山車)について』

舟形山車は信濃、特に諏訪・安曇野地方に集中的に分布している。祭礼で担がれ曳かれるオフネと呼ばれる舟山車の源流は、信濃の中央、諏訪湖畔に位置する諏訪大社であり、上社・下社の祭りでは、独自のオフネが登場することで知られる。これらのオフネは周辺地域に伝播し、各地域独自の様式のオフネが作りあげられた。本報告では、日本の舟山車の特徴をふまえた上で、北信濃に分布するオフネと呼ばれる様々な種類の舟山車を紹介し、歴史的な変遷や伝播の過程を紐解く。さらに、背景となる信仰や出自伝承の観点から、信濃への移入経路について考察した。

⑧-杉浦康平による『龍の船・鳥の船—此岸と彼岸を結ぶ中国・日本の舟山車』

上座部仏教圏であるミャンマーとタイにおいては、龍と鳥それぞれ別の舟山車が存在するが、中国や日本では船首に龍頭をあしらった鷓首を飾る「龍頭鷓首」にみられるように「一對をなす舟山車」の形をとる。「龍頭鷓首」は奈良時代に請来されていた「浄土曼荼羅図」に由来し、日本の『源氏物語』や『紫式部日記』などの王朝文学でも記述されている。

本発表では、前述の鳥の装飾を施すミャンマーのカラウェイ船や多頭の龍をつけるタイの舟山車と関連づけ、この華麗な装飾船「龍頭鷓首」について紹介した。

(3) まとめ

今まで殆どアジアデザインの文脈で紹介されることのなかったタイとミャンマーの山車、そして、アジア諸国の舟山車文化の流れをふまえた上で日本のオフネの存在に焦点をあて、上記研究者を選出し、国際シンポジウムを開催した。

本研究の成果をまとめると

- ①-これまで行われてきた日本の内部での山車の相互比較を、本研究ではアジア諸国へと視野を広げ、異なる文化圏が生み出すデザインの多様性に触れることで、造形に隠された様々な神話のダイナミズムが明らかになった。
- ②-アジア諸国における舟山車の意匠の構成原理を比較することによって、アジア伝統文化のカタチの理解に新たな方向性を示した。
- ③-アジアの図像学、民俗学、さらに宗教学(仏教)の専門知識や研究の手法を取り入れた本研究は、アジアデザイン研究領域のひとつのモデルとなりうると考える。

5. 主な発表論文等

〔図書〕(1冊)

書名:「送る舟・飾る船」アジア「舟山車」の多様性…

監修: 齋木崇人

企画/編集: 杉浦康平

発行日: 2015年3月31日

研究代表者: 杉浦康平

研究分担者: 齋木崇人+今村文彦+山之内誠+黄国賓+さくまはな

P: 183 ページ

〔国際シンポジウム発表〕(計2件)

杉浦康平、『龍の船・鳥の船—此岸と彼岸を結ぶ中国・日本の舟山車』、国際シンポジウム「送る舟、飾る船 アジア「舟山車」の多様性」、神戸芸術工科大学アジアデザイン研究所、吉武記念ホール、査読なし、2013.5.24

黄国賓、『多頭の龍が乱舞する—スラタニのチャクプラ祭』、国際シンポジウム「送る舟、飾る船 アジア「舟山車」の多様性」、神戸芸術工科大学アジアデザイン研究所、吉武記念ホール、査読なし、2013.5.24

6. 研究組織

(1) 研究代表者

杉浦 康平 (SUGIURA, Kohei)

神戸芸術工科大学・アジアデザイン研究所・名誉教授

研究者番号: 00226432

(2) 研究分担者

黄 国賓 (HUANG, Kuo-pin)

神戸芸術工科大学・デザイン学部・准教授

研究者番号: 50441382

今村 文彦 (IMAMURA, Fumihiko)

神戸芸術工科大学・デザイン学部・教授

研究者番号: 50213244

山之内 誠 (YAMANOUCHI, Makoto)

神戸芸術工科大学・デザイン学部・准教授

研究者番号: 40330493

佐久間 華 (SAKUMA, Hana)

神戸芸術工科大学・先端芸術学部・助教

研究者番号: 00589202

齋木 崇人 (SAIKI, Takahito)

神戸芸術工科大学・芸術工学研究科・教授

研究者番号: 90195967